英語の学力評価に関する研究

── 高等学校における英語の学力評定と大学入試成績との関連性──

岩田　保
松田　治
桐原宏行
佐藤将朗

1．問題と目的

現在，わが国の外国語教育のなかで，英語が教科科目として選択され，中学校・高等学校と一貫した系統的指導がなされている理由は，この言語の利用範囲が他の外国語と比べて圧倒的に広い国際語であるからである。近年，わが国の英語教育はかなり様変わりしてきたと言われている。大学においては，かつて入試問題には文法偏重の問題が出されることもあり，「受験英語」という言葉も生まれた。そして，日本人のコミュニケーション能力が欠如している根本原因が受験英語にあると言われることもあった。しかし昨今では，ほとんどの大学で総合力を判定できるような試験問題の作成が手がけられている。難問奇問には現在では批判が集中する。一方，中学校・高等学校においても変化がみられる。平成元年に告示された学習指導要領では，コミュニケーション能力の育成が提唱されている。これは，「読む」「書く」「聴く」「話す」という4つの技能をバランスよく学習し，総合力を高めることを意図したものである（浅野1980，佐藤他1996）。

しかし，中学校・高等学校の現状は，教材が変わっても教育方法はそのままであるなど，いまだに旧態依然たる状況が多々あるようだ。そのような状況下で，現在の高等学校教育における生徒の到達度の指標であると考えられる調査書の学力評定が，様変わりしてきた大学入試問題の成績とどのような関連性を有しているのかを調べることは，現状を認識する意味において，現在の英語教育界全体にとって重要な意味を持つものであると考えることができよう。そこで，本稿では以下の観点から調査・分析を試みることにした。

(1) 調査書の英語の学力評定と入試成績との関連性
(2) 学校ランク別の調査書の英語の学力評定と入試成績との関連性
(3) 現役受験者と浪人受験者別の調査書の英語の学力評定と入試成績との関連性
(4) 調査書の英語の学力評定と入試における英語の成績に関連性の認められなかった者の分析

2．方法

（1）調査対象者

平成7年2月に関東のA大学を受験した672人を対象とした。

（2）調査項目

① 対象者の調査書の英語の学力評定

② 対象者の英語の入試成績

③ 対象者の所属する高等学校のランク

④ 対象者の浪人の有無

3．結果と考察

（1）調査書の英語の学力評定と入試成績との関連性について

Fig. 1には各対象者の調査書の英語の学力評定と入試成績の分布を示す。

まず，両変数の関連性について相関係数を算出したところ，Rs＝0.16という結果が得られた。これによると，両変数間には関連性は認められず，学力評定が高い者ほど入試成績も高く，低い者ほど入試成績も低いということは全体を通しては示唆されなかった。そこで，調査書の学力評定について3.0未満を評定下位群，3.0以上4.0未満を評定中位群，4.0以上5.0以下を評定上位群に分割し，3群間の入試特典の差異について検討した。Fig. 2には各群の入試得点の平均と標準偏差を示す。Fig. 2の結果に基づき分散分析を行ったところ，3群間の入試得点に有意な主効果が認められた（F＝7.58，df＝2/669，p＜.001）。また，入試得点の主効果の多重比較検定（Fisher's PLSD法）を

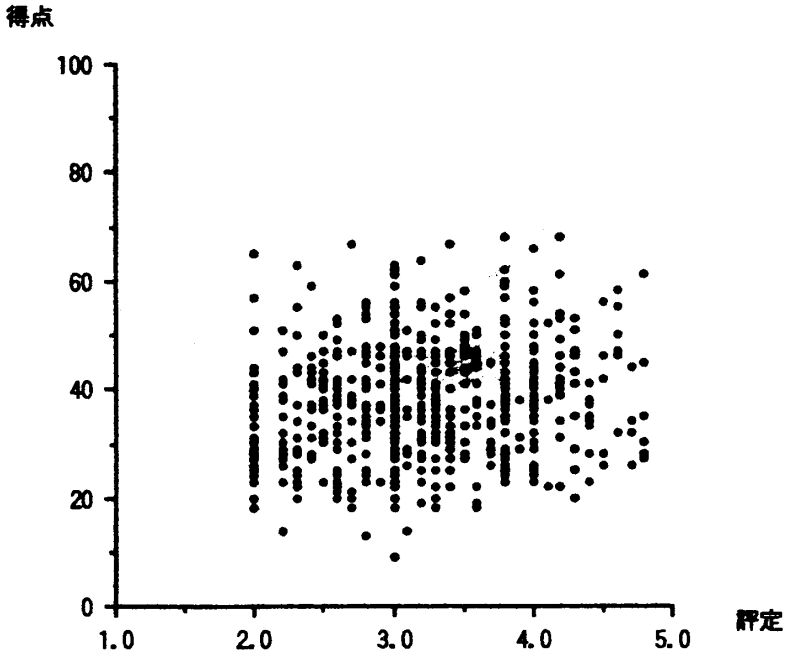

Fig. 1 調査書の英語の学力評定と英語の入試成績の関係

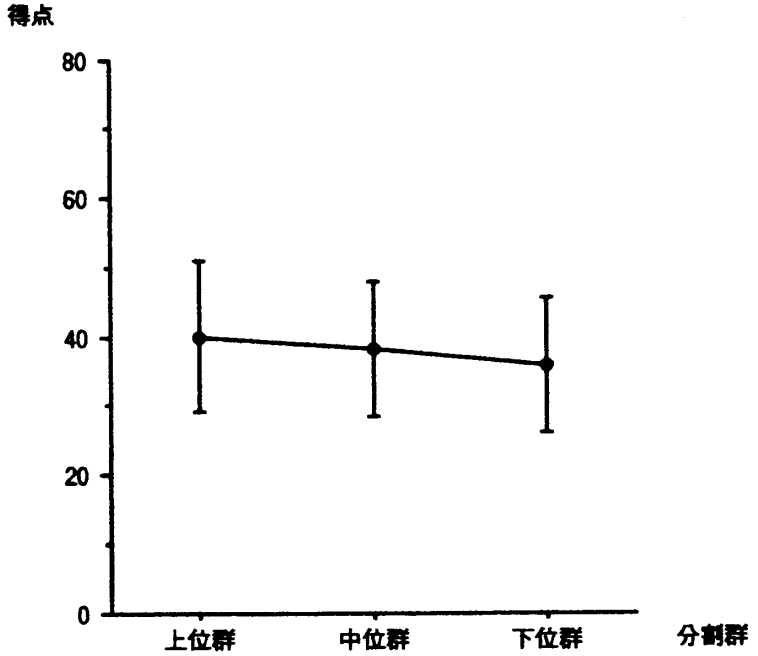

Fig. 2　調査書評定上位群・中位群・下位群の入試得点の平均と標準偏差

行ったところ，評定上位群と下位群，中位群と下位群の間に有意差が認められた。この結果から，学力評定が3.0未満の者は他の群と比較して入試得点が低いことが明らかになった。

（2）　学校ランク別の調査書の英語の学力評定と入試成績との関連性について

Table 1 には対象者の学校ランクの設定基準を，Fig. 3 には学校ランク別の対象者の入試得点の平均と標準偏差を示す。Fig. 3 の結果に基づき 5 群間で分散分析をおこなったところ，5 群間の入試得点に有意な主効果が認められた（$F=13.52$，$df=4/667$，$p<.001$）。

また，入試得点の主効果の多重比較検定を行ったところ，A群と他の全ての群及びB群とC・D群間で有意差が認められた。このことから，Aランク校は他のどのランクよりも入試成績が高く，Bランク校はC，Dランク校よりも入試成績が高いことが明らかになった。Cランク以下の高校間では入試成績に有為な差は認められなかった。

さらに，学校ランク別に受験者の英語学力の評定と入試成績との関係についてTable 2 に整理する。

Table 1　学校ランクの設定基準

ランク	設　定　基　準
Aランク校	合格者／生徒数×100が100％以上
Bランク校	合格者／生徒数×100が20％以上100％未満
Cランク校	合格者／生徒数×100が10％以上 20％未満
Dランク校	合格者／生徒数×100が 1 ％以上 10％未満
Eランク校	合格者／生徒数×100が 1 ％未満

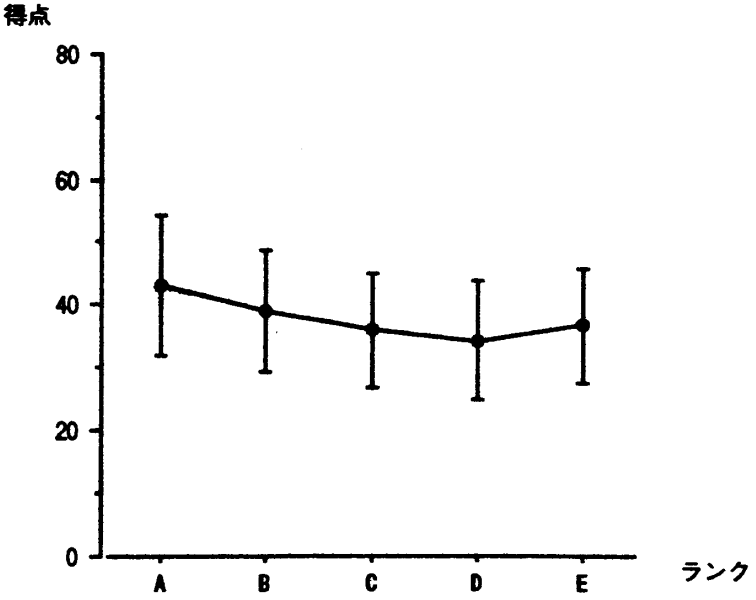

Fig. 3　学校ランク別の入試得点の平均と標準偏差

Table 2　学校ランク別にみた英語学力の評定と入試成績

学校ランク	学力評定と入試成績関係（Rs）	学力評定群別の入試成績の差（F）	多重比較検定		
			上位－中位	上位－下位	中位－下位
A	0.41＊＊＊	5.82＊＊	NS	＊＊	＊＊
B	0.25＊＊＊	9.30＊＊＊	＊	＊＊＊	＊
C	0.32＊＊＊	7.58＊＊＊	NS	＊＊	＊＊＊
D	0.02	0.35　NS	-	-	-
E	-0.05	1.00　NS	-	-	-

＊＊＊ p＜.001　＊＊ p＜.01　＊ p＜.05　NS Non-Significant

Table 2によると，調査書の英語の学力評定が入学試験の成績に直接的に反映されていたのはAランク校に限られており，Aランク校内でも上位群及び中位群に評定された者の入試得点は，評定下位群に比べ高いことが明らかになった。また，B・Cランク校では，全体としては調査書の学力評定が入試成績にやや反映されており，調査書の英語の学力評定が高い者ほど高い入試得点をあげている傾向が認められた。これに対し，D・Eランク校では，調査書の英語の学力評定が入学試験の成績にほとんど反映されておらず，各ランク校内の学力評定が異なっていても入試成績間には差のないことが明らかになった。

（3）現役受験者と浪人受験者別の調査書の英語の学力評定と入試成績との関連性

調査対象者を現役群（60.7%），1浪群（28.6%），2浪以上群（10.7%）の3群に分割し，それぞれの群の入試得点の平均と標準偏差をFig. 4に示す。Fig. 4の結果に基づき，分散分析を行った結果，3群間の入試得点に有意な主効果は認められなかった（F＝0.33，df＝2/669）。

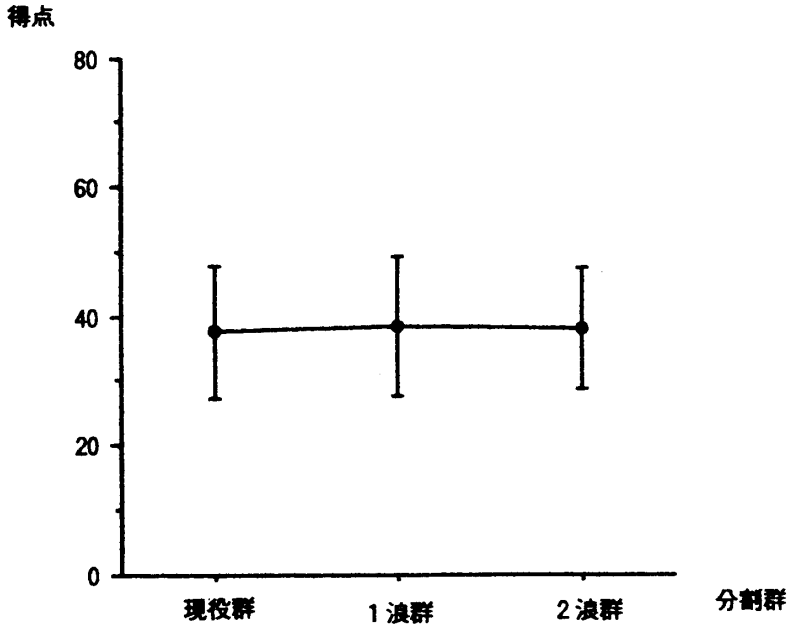

Fig. 4　現役群、1浪群、2浪以上群の入試得点の平均と標準偏差

Table 3　現役・浪人別にみた英語学力の評定と入試成績

学校ランク	学力評定と入試成績関係（Rs）	学力評定群別の入試成績の差（F）	多重比較検定		
			上位－中位	上位－下位	中位－下位
現役	0.19＊＊＊	9.68＊＊＊	NS	＊＊＊	＊＊＊
1浪	0.12	0.53　NS	-	-	-
2浪	0.06	0.09　NS	-	-	-

＊＊＊ p＜.001　NS Non-Significant

さらに，現役・浪人別に受験者の英語学力の評定と入試成績との関係についてTable 3に整理する。Table 3によると，現役群で調査書の英語の学力評定が入試成績にやや反映されていた。具体的には，現役群のみ上位群及び中位群に評定された者の入試得点が，評定下位群に比べ高いことが明らかになった。また，1浪群・2浪以上群では，調査書の英語の学力評定が入学試験の成績に反映されておらず，各群内での学力評定が異なっていても入試成績には差のないことが明らかになった。

（4）調査書の英語の学力評定と入試における英語の成績に関連性の認められなかった者の分析

ここでは調査対象者のうち，調査書の英語の学力評定が入試成績に反映されなかったケースに焦点を当てて分析する。

①　調査書の英語の学力評定が低い者で入試成績が高い者

Table 4には，対象者のうち調査書の英語の学力評定が3.0未満で，入試成績が49点以上の20名の学校ランク，評定，成績，浪人の有無について示す。なお，入試得点の上位群の分割の基準については，平均点より1標準偏差高い者とした。

Table 4　調査書の英語学力評定が低く入試成績の高い者

NO	学校ランク	学力評定	入試成績	経　歴
1	A	2.2	51	浪人
2	B	2.6	53	浪人
3	B	2.5	50	浪人
4	A	2.7	67	浪人
5	D	2.8	53	現役
6	B	2.3	63	浪人
7	A	2.6	52	現役
8	D	2.0	57	浪人
9	D	2.8	55	現役
10	B	2.8	56	現役
11	A	2.0	65	浪人
12	B	2.3	55	現役
13	B	2.4	59	浪人
14	B	2.8	54	現役
15	A	2.3	50	浪人
16	A	2.0	51	現役
17	B	2.8	53	現役
18	A	2.6	49	現役
19	E	2.8	53	浪人
20	A	2.0	51	浪人

Table 4によると，学校ランクについてはAランク校8名，Bランク校8名，Cランク校0名，Dランク校3名，Eランク校1名であった。また，浪人の有無については現役群が9名，浪人群が11名であった。このように調査書の英語の学力評定は低いが入試成績の高いグループの特徴としては，上位ランク校の受験者が多く，半数以上が浪人生である傾向が明らかになった。

② 調査書の英語の学力評定が高い者で入試成績が低い者

Table 5には，対象者のうち調査書の英語の学力評定が4.0以上で，入試成績が27点以下の16名の学校ランク，評定，成績，浪人の有無について示す。なお，入試得点の下位群の分割の基準については，平均点より1標準偏差低い者とした。

Table 5によると，学校ランクについてはAランク校0名，Bランク校2名，Cランク校3名，Dランク校10名，Eランク校1名であった。また，現役の有無については現役群が10名，浪人群が6名であった。このように調査書の英語の学力評定は高いが入試成績の低いグループの特徴としては，下位ランク校の受験者が多く，現役が半数以上である傾向が明らかになった。

Table 5　調査書の英語学力評定が高く入試成績の低い者

NO	学校ランク	学力評定	入試成績	経　歴
1	B	4.0	24	現役
2	D	4.7	26	浪人
3	C	4.1	22	浪人
4	D	4.3	25	現役
5	D	4.0	24	現役
6	B	4.4	23	現役
7	D	4.0	25	浪人
8	D	4.2	22	浪人
9	D	4.0	23	現役
10	D	4.0	26	現役
11	E	5.0	25	浪人
12	D	4.3	25	浪人
13	D	4.5	26	現役
14	C	4.8	27	現役
15	C	4.2	22	現役
16	D	4.3	20	現役

以上の結果を概観すると，「新しい学力観」による学力評価の視点が変わっても，高校の調査書の英語の学力評定が直接的に入試成績に影響を及ぼしているのは一部の限られた者だけであり，生徒の所属する学校のランクが主な背景要因となっていた。換言すれば，いくら学力の捉え方が変化し，生徒の質的な面での絶対的な伸びを重視しようというスローガンが掲げられていても，実態としては，まだまだ従来となんら変わりない相対的評価に基づく大学への進路決定がなされているといえよう。

このような状況を少しでも改善するためには，高等学校における英語の運用能力の向上に向けた指導の強化や評価方法の確立とともに，入学試験の質的変化も必要ではなかろうか。具体的には，英文和訳，和文英訳，文法・語彙の形式的な知識の評価に加えて，リスニング能力の評価・スピーキング能力の評価・ディベートや英語を使った集団面接・資料を読みとり，自分の意見を述べるテストの実施・自由英作文の実施などの実用的なコミュニケーション能力の評価を行っていくことが考えられる。これらの評価は，「新しい学力観」により形成された，生徒の「興味」「関心」「意欲」「態度」の評価に直結するものであると同時に，高等学校で行われているコミュニケーション能力の育成のための指導の効果を検証できる機会をももたらすであろう。

（いわた・たもつ　つくば国際大学）
（まつだ・おさむ　つくば国際大学）

（きりはら・ひろゆき　つくば国際大学）
（さとう・まさあき　筑波大学）

参考文献

1. 浅野博（1980）：「"In Defence of the Language Laboratory,"　外国語教育論集」vol. 1, The Foreign Language Center, University of Tsukuba.
2. 橋本重治（1970）：「新・教育評価法概説」，金子書房.
3. 稲村松雄編（1970）：「評価と測定」，研究社
4. 石坂和夫編（1993）：「国際理解教育事典」，創友社.
5. 影浦攻著（1994）：「新しい学力観に立つ英語科の評価」，明治図書.
6. 近藤大生・有本章編（1984）：「現代社会と教育」，福村出版.
7. 佐藤猛郎・松田治・佐藤敏子・岩田保・石垣明子・加藤百合・中村典生（1996）：「Listening Conmprehensionの伸長を目指した授業形態と教材の検討」Bulletin of Tsukuba International University, vol 2, Tsukuba International University, 85-100.
8. 田中敏・山際勇一郎著（1989）：「ユーザーのための教育・心理統計と実験計画法」，教育出版.
9. 土屋澄男著（1990）：「英語科教育法入門」，研究社

The Relationship between the Grades of High School Records of the University Applicants and Their Scores in English at the University Entrance Examination.

Tamotsu Iwata
Osamu Matsuda
Hiroyuki Kirihara
Masaaki Sato

The purpose of this study is to examine the correlation between the grades of high school reports and their scores on the entrance examinations in English for the university.

The subjects are 672 applicants who took the entrance examination of a university in Kanto District.

The results of the examination led to the following conclusions:

(1) No significant correlation could be found between the grades of high school reports and their scores on the entrance examination for the university.

(2) The applicants from the high schools that are generally ranked higher than the others got higher scores.

(3) As for the applicants who were in the 3rd year of high schools, there was a close correlation between the grades of their high school reports and their scores on the entrance examination for the university. On the other hand, such a correlation could not be found for the high school graduate applicants.

(4) The students who proved to have no correlation between their grades in high school reports and their scores on the entrance examinations for the university can be divided into two sub-groups: one is the group of graduate applicants, and the other is the group of applicants from high schools that are ranked comparatively lower.

Key Words: Grades of High School Records, Scores in English at the University Entrance Examination